

2. ライフサイクル分析による組織運営の特徴

団体における活動の活発度について、設立年から現在に至るまでをフリーハンドでの回答を求め、その結果を類型化した。

2-1 組織運営ライフサイクル分析の4類型

①「成長型」→該当団体：15団体

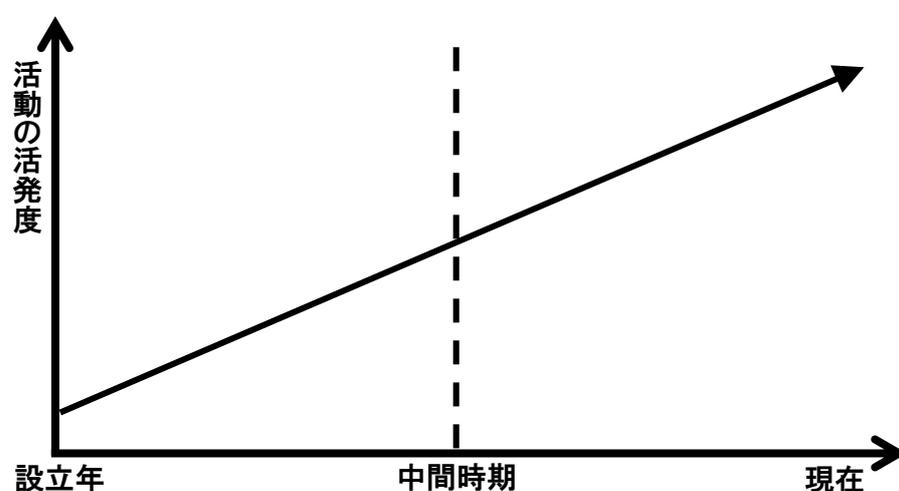


図 14. 組織運営ライフサイクル分析（「成長型」モデル）

○活発化要因

- ・行政からの補助事業、協働事業による活動の活発化
- ・活動に関わるイベントの増加、それに伴うボランティア研修の充実
- ・団体の法人格取得による組織基盤の充実

【代表モデル：ABC 団体】

1998 年に活動を開始し、2000 年に NPO 法人格を取得。設立当初の登録者数は 10 人であったが、2006 年から行政との協働事業をスタートしたことにより、安定した活動の場を得られた。現在では、若い世代の登録者が増え、60 人の登録者で順調に活動が継続している。

②「維持型」→該当団体：7団体

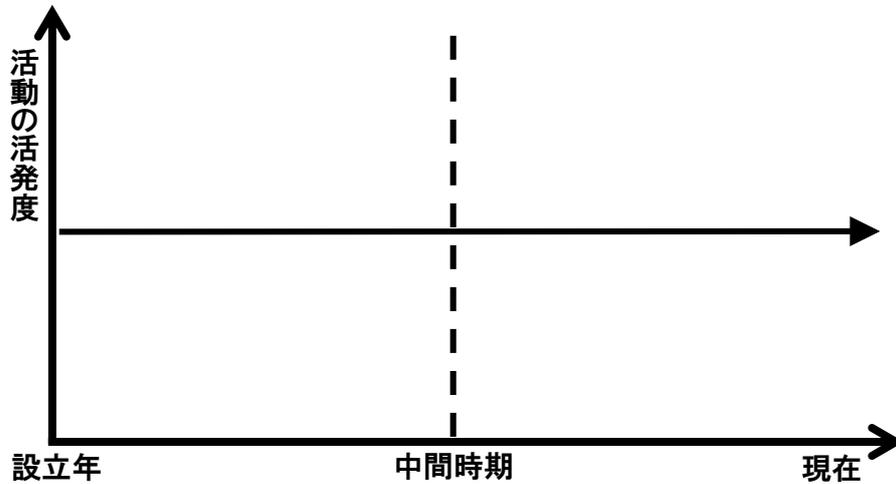


図 15. 組織運営ライフサイクル分析（「維持型」モデル）

○活発化要因

- ・ イベント開催に伴うボランティア研修の充実
- ・ 活動領域の拡大

●衰退化要因

- ・ 活動のマンネリ化
- ・ 外部のスポーツ団体との連携の希薄化

【代表モデル：DEF 団体】

1993年に設立され、主に障害者スポーツのイベント・大会に関わる活動を行っており、設立当時、登録者は30人であった。その後、障害者スポーツセンターや障害者スポーツ協会との連携が十分に取れない時期があり、活動に若干の衰退があったが、現在は100人の登録者があり、年間に137日の活動日があるなど安定した活動を継続している。

③「成熟衰退型」→該当団体：5団体

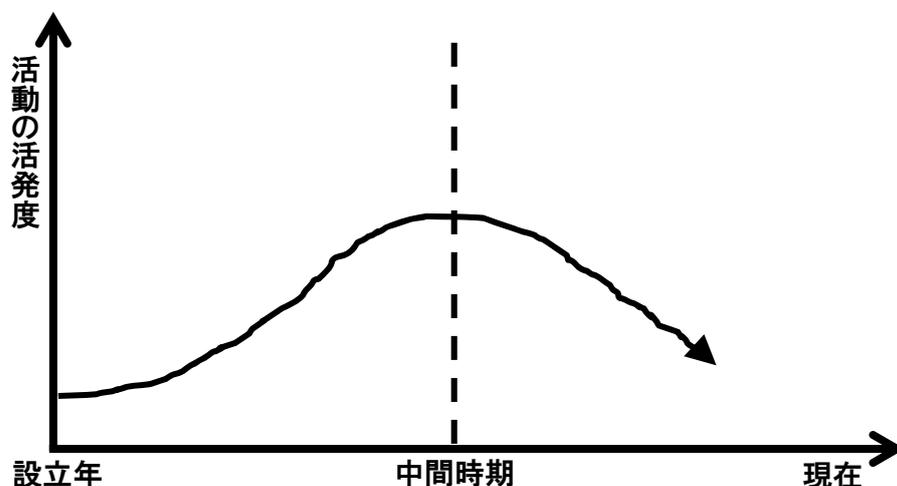


図 16. 組織運営ライフサイクル分析（「成熟衰退型」モデル）

● 衰退化要因

- ・ 委託事業の廃止に伴う、財政基盤の弱体化
- ・ 会員の高齢化・活動意欲の低下

【代表モデル：GHI 団体】

2001年に設立され、行政からの委託事業によりボランティア養成が順調に進んでいた。ピーク時には1,160人もの登録があったものの、行政の財政的な理由により委託事業が廃止され、登録者数も頭打ちとなった。活動メンバーの固定化もあったことから、2011年に登録更新の意思確認を行い、登録者が大幅に減少（66人）した。

④「消滅型」→該当団体：2団体

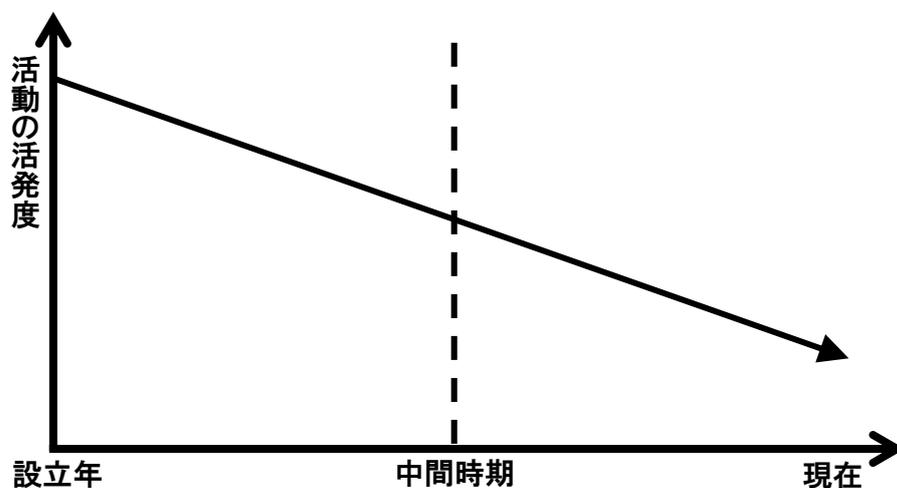


図 17. 組織運営ライフサイクル分析（「消滅型」モデル）

● 衰退化要因

- ・ 設立後の運営体制が不明瞭

【代表モデル：JKL 団体】

2001年に全国規模のスポーツイベントの開催を機に、ボランティアデータベースが立ち上げられ、設置当時は885人のボランティアが登録されていた。しかし、イベント後にデータベースを管理するセンターの運営体制が定まらず、現在は登録者0人となって活動停止状態にある。

以上の4つの類型化をもとに、表4にその特徴をまとめた。

表 4. 組織運営ライフサイクル分析のタイプ別特徴のまとめ

	活動基盤	特徴
成長型	NPO法人、公益財団法人	<ul style="list-style-type: none"> ・行政からの補助事業、協働事業による活動の活発化 ・活動に関わるイベントの増加、それに伴うボランティア研修の充実 ・団体の法人格取得による基盤の充実
維持型	行政、行政外郭団体	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント開催に伴うボランティア研修の充実 ・活動領域の拡大 ・活動のマンネリ化 ・外部のスポーツ団体との連携の希薄化
成熟衰退型	行政外郭団体	<ul style="list-style-type: none"> ・委託事業の廃止に伴う、財政基盤の弱体化 ・会員の高齢化・活動意欲の低下
消滅型	行政、行政外郭団体	<ul style="list-style-type: none"> ・設立後の運営体制が不明瞭

図19は、本調査の回答団体の組織運営ライフサイクル分析のタイプ別の割合を示している。「成長型」の団体が全体の約半数（51.7%、15団体）を占めており、「維持型」が4分の1（24.1%、7団体）、「成熟衰退型」が17.2%（5団体）、「消滅型」は6.9%（2団体）であった。

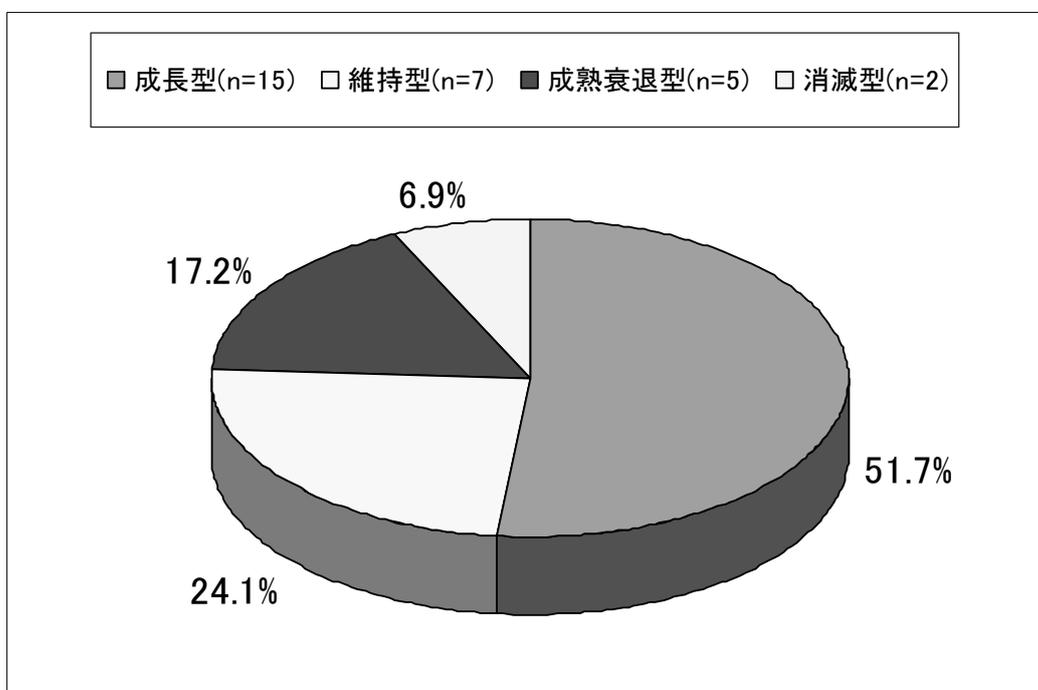


図 19. スポーツボランティア関係団体の組織運営ライフサイクルの割合 (タイプ別) (n=29)

なお、図 14～17 のフリーハンドの回答を補足するために、「登録者数が最も多かった時期」「活動が最も盛んだった時期」についてたずねた。

図 18 は、団体の登録者数が最も多かった時期を示している。「現在」(60.7%, 17 団体)が全体の 6 割以上を占めていた。「その他」の回答には、設立からの年数があげられており、「10 年以上」の回答が 4 団体あった。

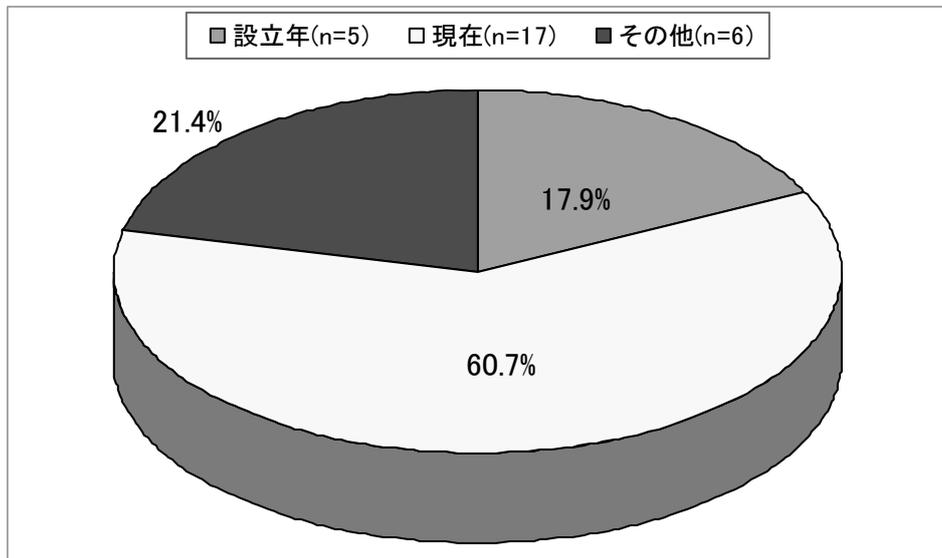


図 18. 最大登録者数時期 (n=28)

図 19 は、団体の活動が最も盛んだった時期を示している。「現在」(58.6%, 17 団体)が最も多く、全体の約 6 割を占めていた。「その他」の回答には、設立からの年数があげられており、「3 年～6 年」の範囲の回答が 3 団体あった。

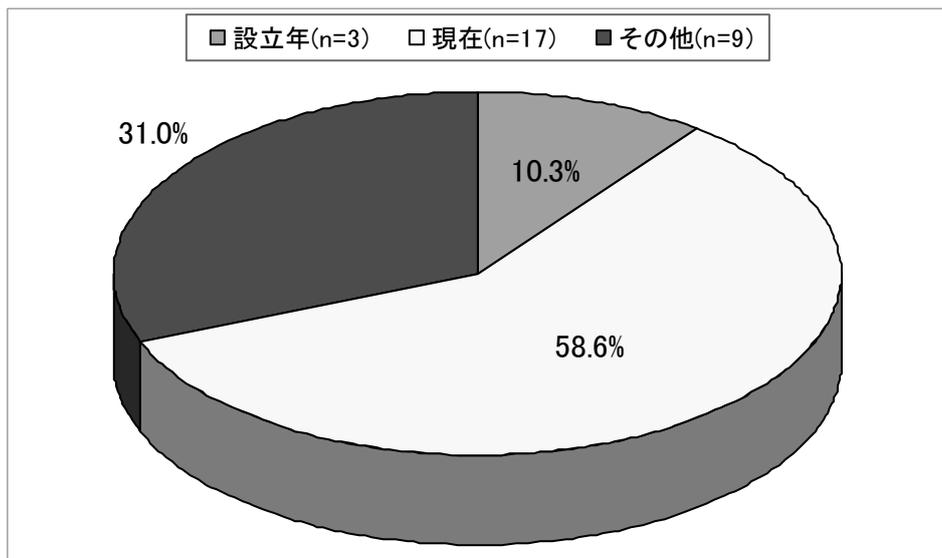


図 19. 活動最盛期時期 (n=29)

2-2 組織運営ライフサイクルのタイプ別にみた団体の特徴

図 20 は、団体の法人格取得の有無に関して、組織運営ライフサイクルのタイプ別に比較した結果である。「成長型」では、3分の2の団体が法人格を取得しており、「維持型」では3割以下、「成熟衰退型」では4割にとどまっている。

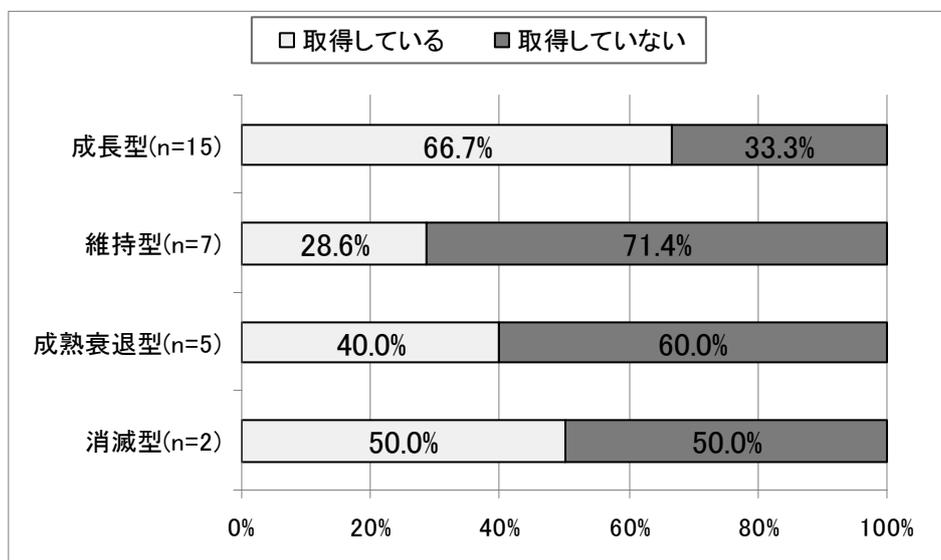


図 20. 法人格取得の有無（タイプ別）（n=29）

図 21 は、団体の総会（理事会）の開催に関して、組織運営ライフサイクルタイプ別に比較した結果である。「成長型」においては85%以上（86.7%、13団体）が定期的に開催しており、「維持型」（71.4%、5団体）、「成熟衰退型」（80.0%、4団体）においても高い割合で定期的に開催されていた。

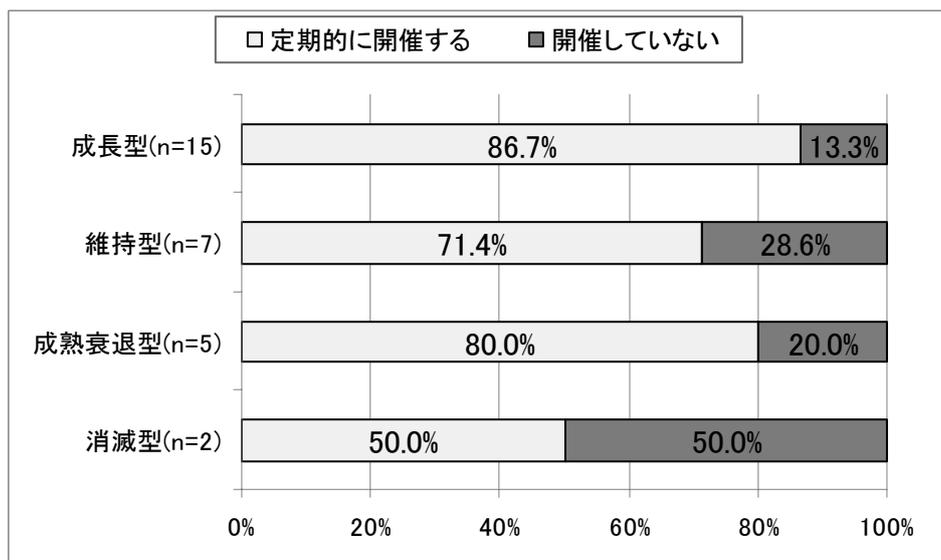


図 21. 団体の総会（理事会）の開催（タイプ別）（n=29）

図 22 は、団体の収支決算書の有無に関して、組織運営ライフサイクルタイプ別に比較した結果である。「成長型」「維持型」「成熟衰退型」のいずれも、8割以上が収支決算書は「ある」と回答している。

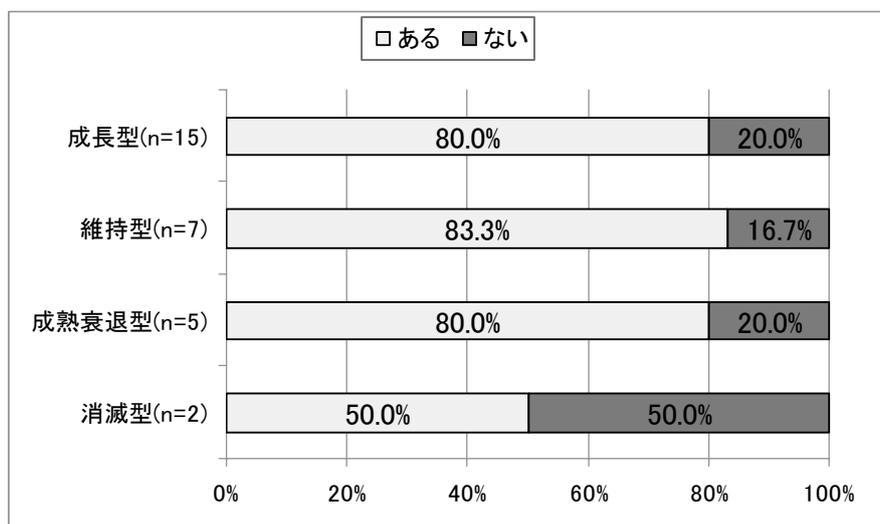


図 22. 団体の収支決算書の有無（タイプ別）（n=29）

図 23 は、団体のボランティア登録者の年代の特徴に関して、組織運営ライフサイクルタイプ別に比較した結果である。「成長型」については、「高齢者中心〔高齢者層（65歳以上）が多い〕」が20%（3団体）と少なく「中年者中心〔中年者層（45～64歳）が多い〕」（46.8%）と「多世代型〔各年代まんべんなくいる〕」（20.0%）が多い。「維持型」は、「高齢者中心」と「中年者中心」「多世代型」がそれぞれ3割弱を占めている。「成熟衰退型」は、「中年者中心」が6割、「高齢者中心」が4割である。「消滅型」は、1団体で「中年者中心」であった。

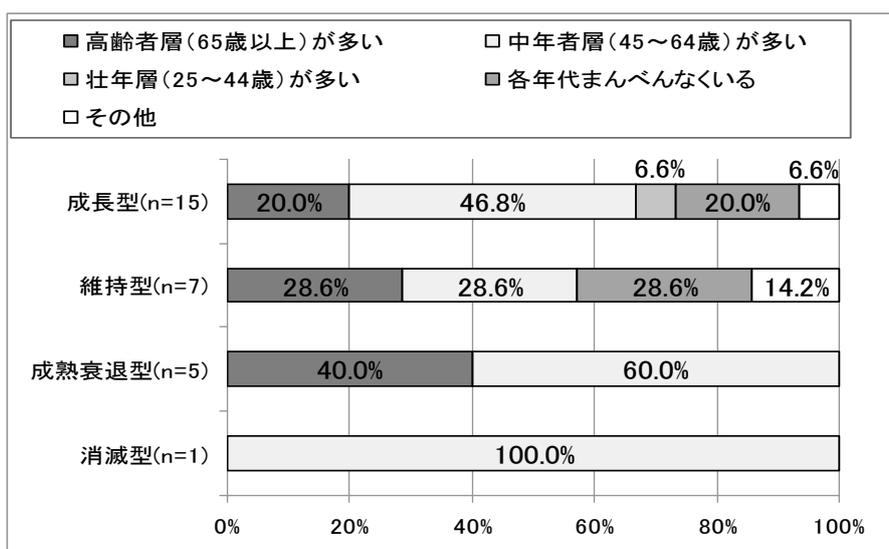


図 23. ボランティア登録者の年代の特徴（タイプ別）（n=28）

図 24 は、団体における登録者向けの講習会実施の有無について、組織運営ライフサイクルタイプ別に比較した結果である。「成長型」については、8割が講習会を実施しており、講習会の開催が成長の鍵であると推察される。

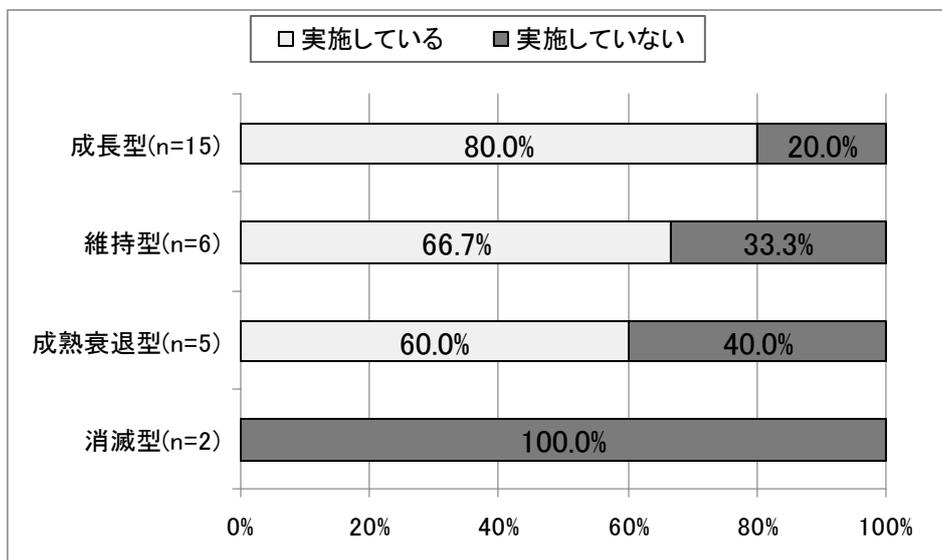


図 24. 登録者向けの講習会実施の有無（タイプ別）（n=28）

図 25 は、団体のソーシャル・キャピタル（社会関係資本）について、スポーツのネットワークおよび地域のネットワークの交流頻度（p3,表 I）を、組織運営ライフサイクルタイプ別に比較した結果である。なお、「消滅型」については有効なサンプルが n=1 となっており、「成長型」「維持型」「成熟衰退型」の 3 タイプで比較を行っている。

タイプ別で特徴的な傾向が見られた項目は、「行政担当職員」「団体所在地のスポーツ以外の地域団体関係者」「団体所在地の近隣の住民」である。「行政担当職員」との交流頻度に関しては、「成長型」と「維持型」について 4 割以上が「月 2 日以上」という交流頻度があり、団体の活動に関して行政とのコミュニケーションが図られていることが推察される。「団体所在地のスポーツ以外の地域団体関係者」と「団体所在地の近隣の住民」の交流頻度に関しては、いずれも「成長型」の 3 分の 1 以上が「月 2 日以上」の交流頻度があり、活動を活発化していく上で、地域団体、および近隣の住民との関係性を築いている様子がうかがえる。

一方、「団体の登録者」「他のスポーツボランティア団体の関係者」「団体所在地の地域におけるスポーツ団体の関係者」については、タイプ別での特徴的な傾向が見られなかった。特に「他のスポーツボランティア団体の関係者」、「団体所在地の地域におけるスポーツ団体の関係者」との交流頻度は、いずれのタイプも「月 2 日以上」が 4 割以下となっており、今後、スポーツボランティア活動の活性化をより進めていく上で、スポーツボランティア団体と地域スポーツ団体、スポーツボランティア団体同士のコミュニケーションの機会を設け、相互の連携を深めていく必要があると考えられる。

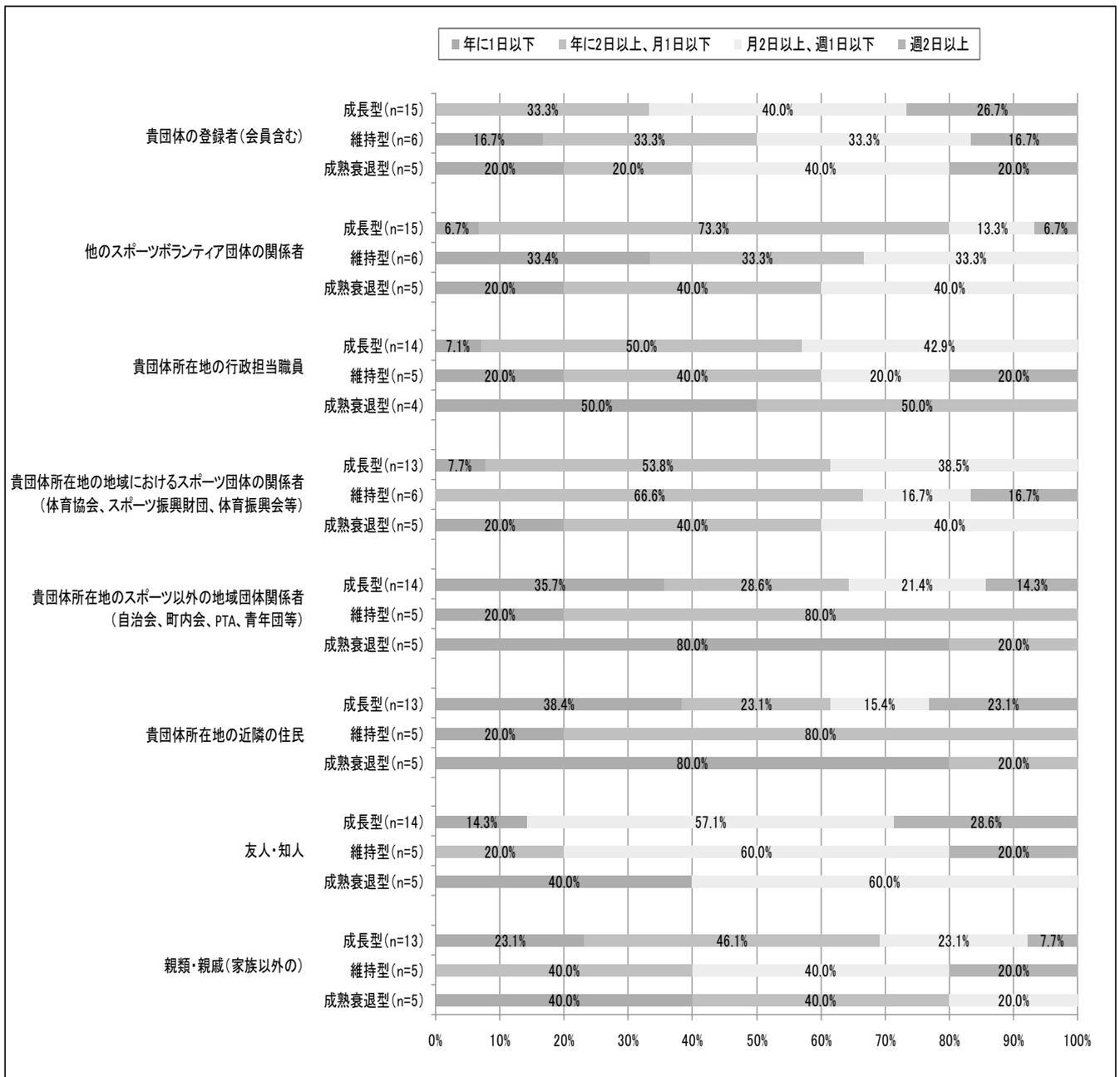


図 25. ボランティア団体のタイプ別にみた、スポーツおよび地域のネットワークとの交流頻度
ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の状況